

# 阿波國府跡第7次調査概報

— 1 9 8 8 年 度 —

1989

徳島市教育委員会



# 阿波国府跡第7次調査概報

— 1 9 8 8 年 度 —

1989

徳島市教育委員会

## 序

阿波国府は、奈良時代の中央集権化の中で、地方行政官庁として造営されたものです。

阿波国府は、徳島市国府町府中の大御和神社を中心に展開したといわれますが、長い歴史の経過の中で幾多の変遷を繰り返し、威容を誇ったと思われる奈良・平安時代の府域や政府の建物は地下深く眠ってしまったようです。

昭和57年度より国庫補助を受けて、県下でも最大級の重要遺跡である阿波国府跡の府域及び政府の規模・構造などの確認調査を実施しております。

本遺跡の調査によって、該期の歴史的環境の復元あるいは文化と技術の伝播状態を把握する上において貴重な資料が提供されるものと思われます。

最後に、調査にあたりまして、御指導・御助言をいただきました研究者の方々をはじめ、地元及び地権者の方々の真摯な御助力に対して深く感謝いたします。

平成元年3月31日

徳島市教育委員会

教育長 久木吉春

## 例　　言

- 1 本書は、昭和63年度に国庫補助を受けて実施した阿波国府跡の重要遺跡確認調査（第7次調査）の概要報告書である。
- 2 発掘調査は、徳島市教育委員会が主体となり、平成元年2月10日から同年3月31日まで実施した。また、事務処理については徳島市教育委員会社会教育課が担当した。
- 3 調査は、一山　典（社会教育課主任）、三宅良明（社会教育課主事）を調査担当者とし、調査員として高木　淳、倉佐晃次が携わった。
- 4 発掘調査地点は、徳島市国府町観音寺字神明417 および国府町観音寺字かうげ524-6である。
- 5 本書に収録した遺構実測は、調査員・調査補助員が分担した。また、遺構図トレース・遺物実測およびトレース・写真撮影は三宅が担当した。
- 6 第1図の地図は、徳島市発行の「徳島市全図」1:2,500地形図を転載し、若干補正した。
- 7 土色の判定は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』1967 によった。
- 8 調査にあたって、島巡賢二氏より御教示をうけた。また、土地所有者の鈴江襄治氏、坂東和一氏をはじめ、多くの方々の御援助を賜った。
- 9 本書は、三宅が編集・執筆した。

## 本文目次

I はじめに	1
II 神明地区の調査成果の概要	
1. 基本層序	1
2. 検出遺構	6
3. 出土遺物	6
III かうげ地区の調査成果の概要	10
IV 小結	10

## 挿図目次

第1図	調査地点周辺地形図	2
第2図	神明地区検出遺構配置図	3
第3図	神明地区D-I, II区第2遺構面	5
第4図	神明地区出土土師器実測図	7
第5図	神明地区出土須恵器・軒平瓦実測図	8
第6図	神明地区出土土師器・弥生土器実測図	9
第7図	かうげ地区発掘調査区	11
第8図	かうげ地区トレンチ東壁(上・中), 南壁(下)実測図	12

## 図版目次

図版1	神明地区遺構検出状況	南東より
	同 上	南西より
図版2	神明地区遺構検出状況	北西より
	神明地区土層堆積状況(南東隅)	
図版3	神明地区D-I・II区第1遺構面検出状況	北より
	同 上 第2遺構面検出状況	北より
図版4	神明地区須恵器高环出土状況	
	神明地区土師器高环出土状況	
図版5	神明地区P-1007須恵器高环出土状況	
	神明地区サブトレンチ上層堆積状況	
図版6	かうげ地区調査区近景	南より
	かうげ地区トレンチ南面土層堆積状況	
図版7	神明地区出土土師器・須恵器・軒平瓦	
図版8	神明地区出土土師器・弥生土器	

## I はじめに

阿波国府跡の府域が推進される徳島市国府町の南部は、吉野川の一主流である鮎喰川が西岸に形成した沖積平野のいわば喉元部にある。この地域は、弥生時代中・後期を中心年代とする一大集落である矢野遺跡をはじめ、西方には古墳群としては県内最大の氣延山古墳群、さらには阿波国分寺跡、國分尼寺跡など多数の遺跡が存在し、原始・古代の阿波国の中核地であった。

阿波国府跡の所在地については、国府町府中に所在する、かつて印鑑大明神と呼ばれていた大御和神社の周辺が想定されていたため、昭和57年度の第1次調査にはじまる阿波国府跡重要遺跡確認調査は、この大御和神社を中心とした地域において、昨年度までに6次にわたって実施してきた。しかし、まだ政府の所在や府域の確認には至っていない。このような暗中模索の状態が続くなか、6次調査では、多量の土器を伴う溝や掘立柱建物跡、墨書き土器・石帶など国府跡に関連すると思われる遺構・遺物が検出された。<sup>註1)</sup>

本年度の調査は、6次調査の成果をふまえ、それらの遺構の性格や拡がりをより詳細に究明する必要もあり、前回の調査地の近辺に調査地を選定した。

一ヵ所は、第6次調査地の西方約50mの地点で、遺構・遺物の密な検出が十分期待される所で、350m<sup>2</sup>を対象とした。もう一ヵ所は、そこからさらに西へ約200mの地点で150m<sup>2</sup>の調査を実施した。

前者を神明地区、後者をかうげ地区と仮称し、以下それぞれの地区における調査成果の概要を述べる。

## II 神明地区の調査成果の概要

### 1. 基本層序

本調査区の地目は宅地であり、現地表面で標高約8.1mを測る。

第1層 表土(盛土)。層厚約20cm~30cm。

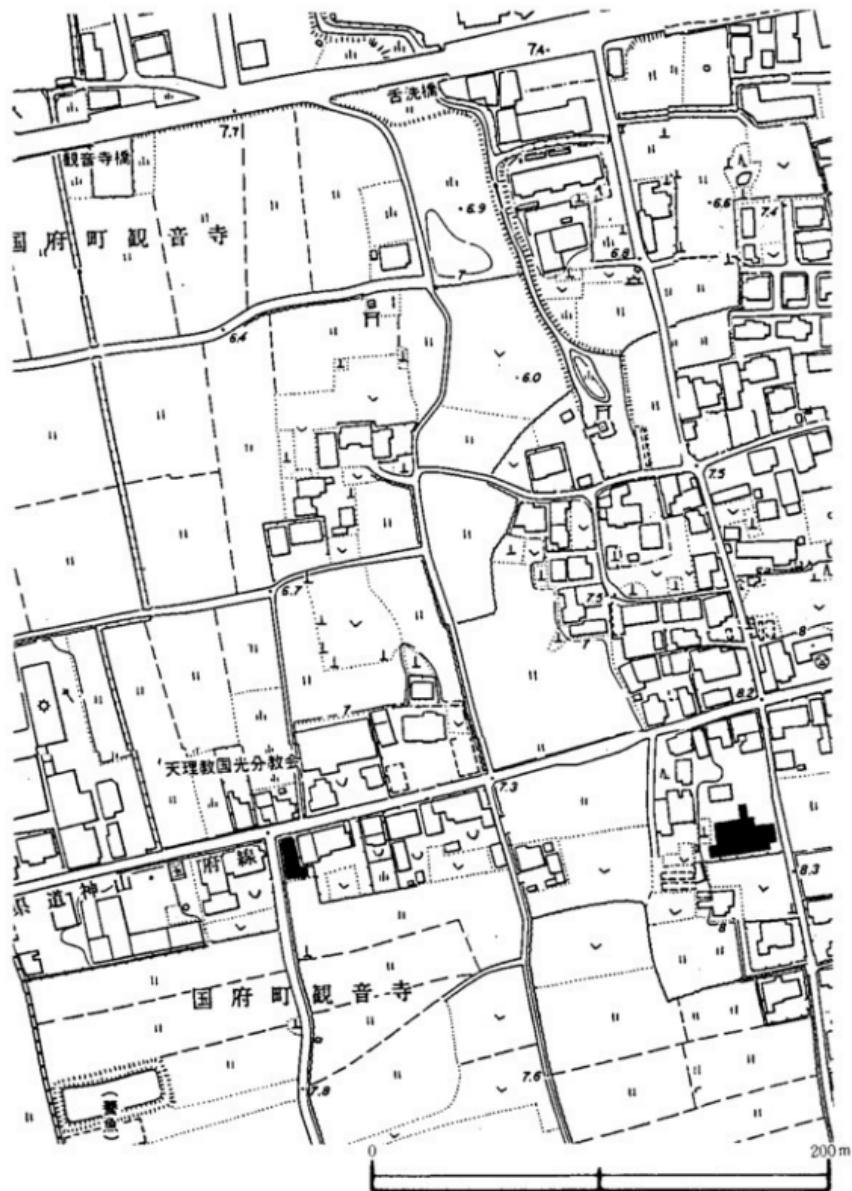
第2層 旧耕作土。層厚約20cm。近・現代以降の層であり、土師器・須恵器の細片をはじめとする遺物を若干含むが、いずれも下層からの浮上物と考えられる。

第3層 黒褐色弱粘質土。層厚20~40cm。土師器・須恵器の細片と若干の弥生土器を包含する。遺構面をなす。

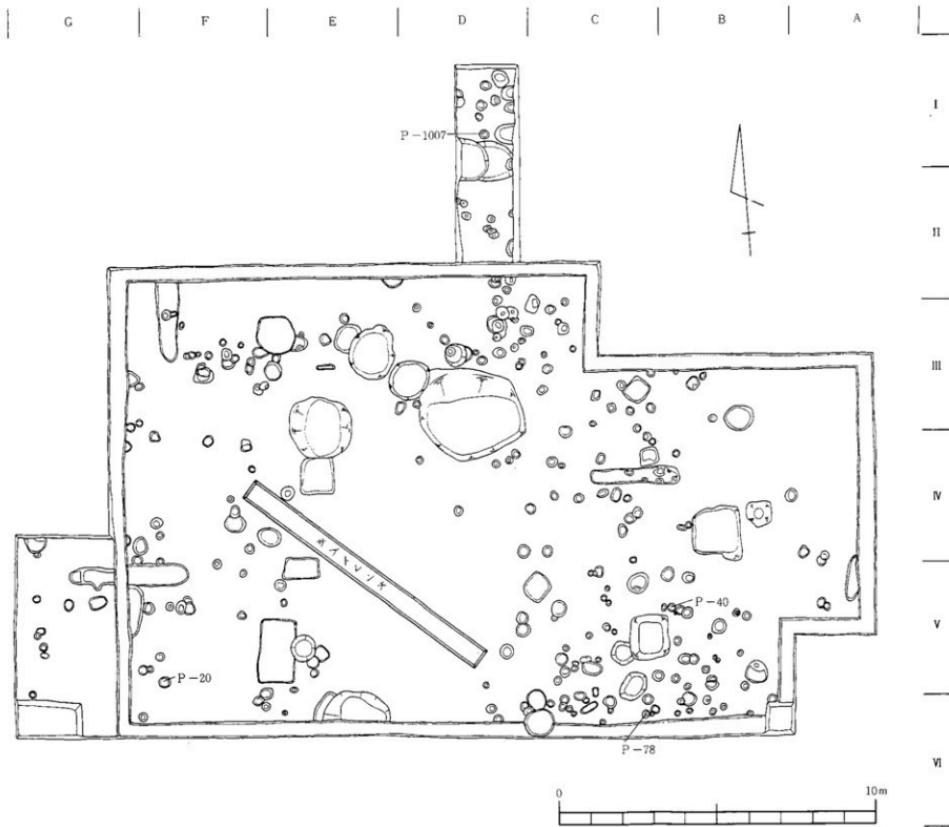
第4層 明黄褐色弱粘質土。層厚約10cm。ただしこの層は、調査区内においてはごく部分的にしか存在しない。遺構面をなす。

第5層 砂疊層。上層部に若干の弥生土器と古墳時代の土師器を包含する。

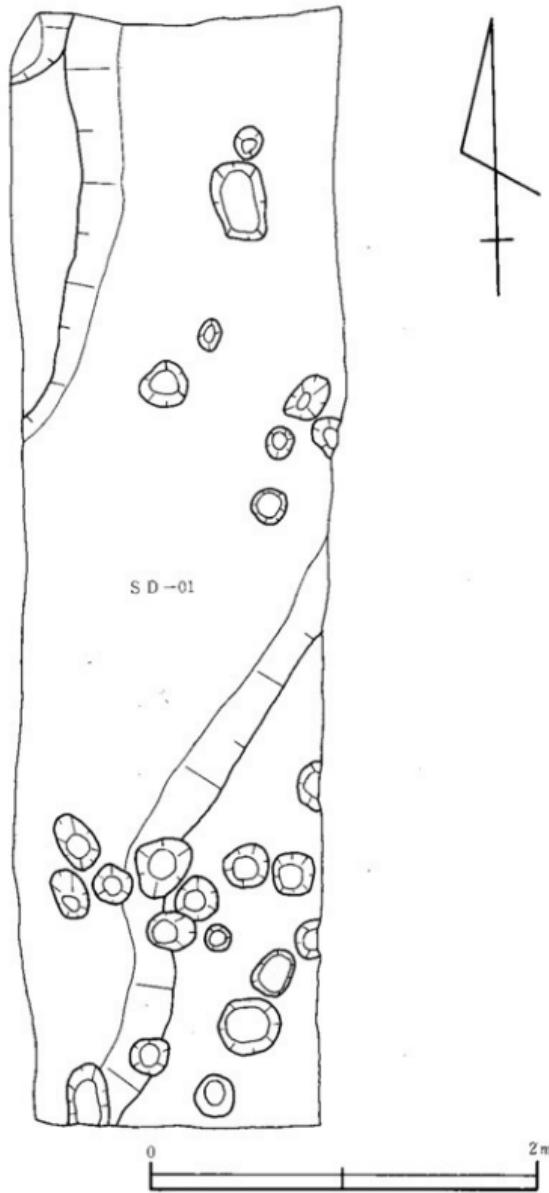
以上のように大別されるが、本調査地は現状は空き地と化しているが、以前は家屋が建っていたため、調査区内のいたるところで第3層まで攪乱がおよんでいる。



第1図 調査地点周辺地形図



第2図 神明地区検出岩構配図



第3図 神明地区D-I・II区第2遺構面

## 2. 検出遺構（第2図）

本調査区で検出された遺構のはほとんどは、第3層を遺構面とする小規模なピットであり、他に浅い落ち込みを呈する不明遺構（土壤？）が数基検出されたにすぎない。ピットは、埋土の違いによって3～4種類に分類されるが、遺物をほとんど伴わないので、それらの年代および時期的な前後関係は不明である。また、掘立柱建物が建つ痕跡もなく、したがって特筆する遺構の検出には至らなかったというのが実情である。ただ、南北に長く6m×2mで設定した調査区（D-I・II区）においては、第3層遺構面の下約15cmに第4層明黄褐色弱粘質土が存在し、ピット、溝（SD-01）が検出され、明らかに第2遺構面として捉えることができた（第3図）。溝は北東一南西方向に主軸をもち、幅約2m、深さ約20cmを測る。遺物は土師器片を少量含むにすぎず、溝の年代・性格は不詳である。この第2遺構面およびSD-01は、南側のD-III区に入ったところで消滅する。

## 3. 出土遺物（第4図、第5図、第6図）

出土遺物には、土師器・須恵器および弥生土器の破片があるが、ほとんどが包含層一括としての出土であり、遺構に伴うものはごく僅かであった。

第4図は土師器である。これらの土師器のほとんどは、第6次調査において出土した遺物と同タイプに属するものである。8は底部に系切り痕を残す小皿である。他の土器の多くは、底部に粘土繙<sup>(7)</sup>の痕跡をとどめている。4、5、8はP（ピット）-40から、13はP-20から、9はP-78から出土している。第5図3、4は須恵器高杯で、4はD-I区第1遺面のP-1007からの出土である。1は須恵器甕の口縁部である。

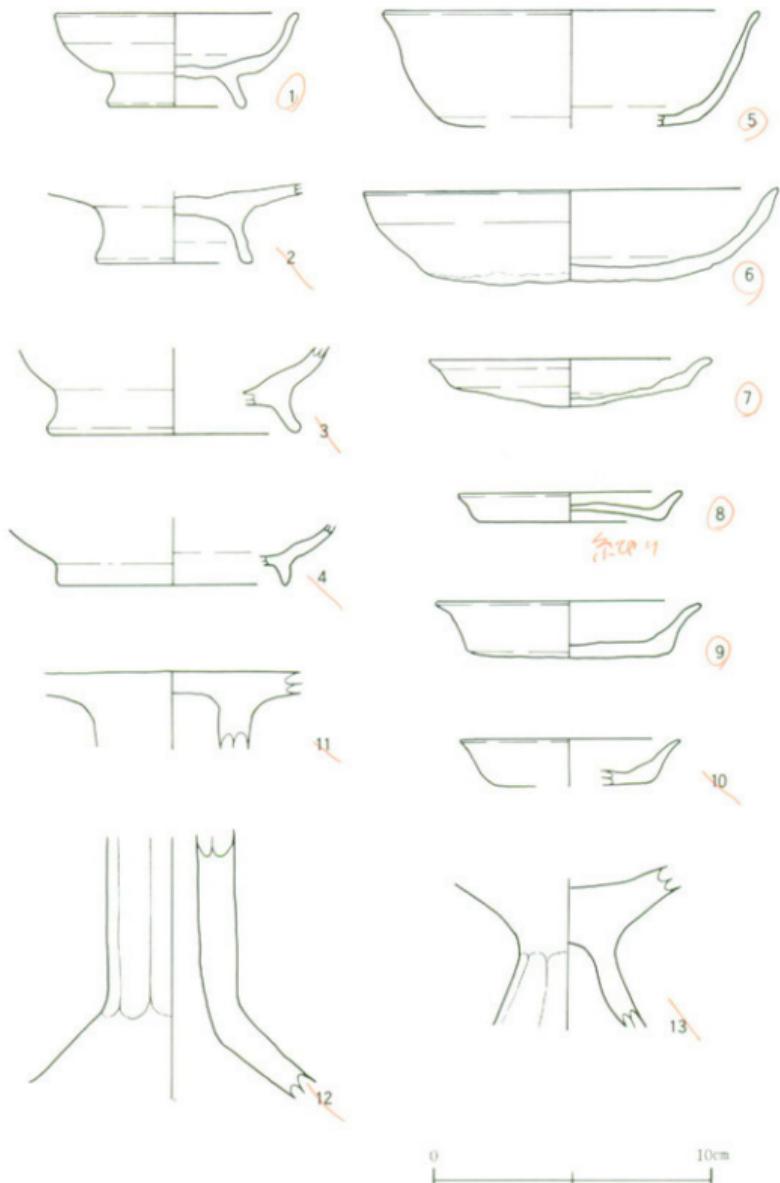
第6図は、黒褐色弱粘質包含層から砂礫層上層部にかけて出土した遺物で、1、4～6は弥生土器、2、3は土師器である。4～6は襲形土器の底部で、弥生時代前期～中期頃のものである。1は後期の長頸壺形土器で、外表面は縱方向の精緻なヘラ磨きが施されている。3は小形の無頭の壺形土器で、球形を呈する。

2は高杯形土器である。2、3は古墳時代初頭に属するものと考えられる。

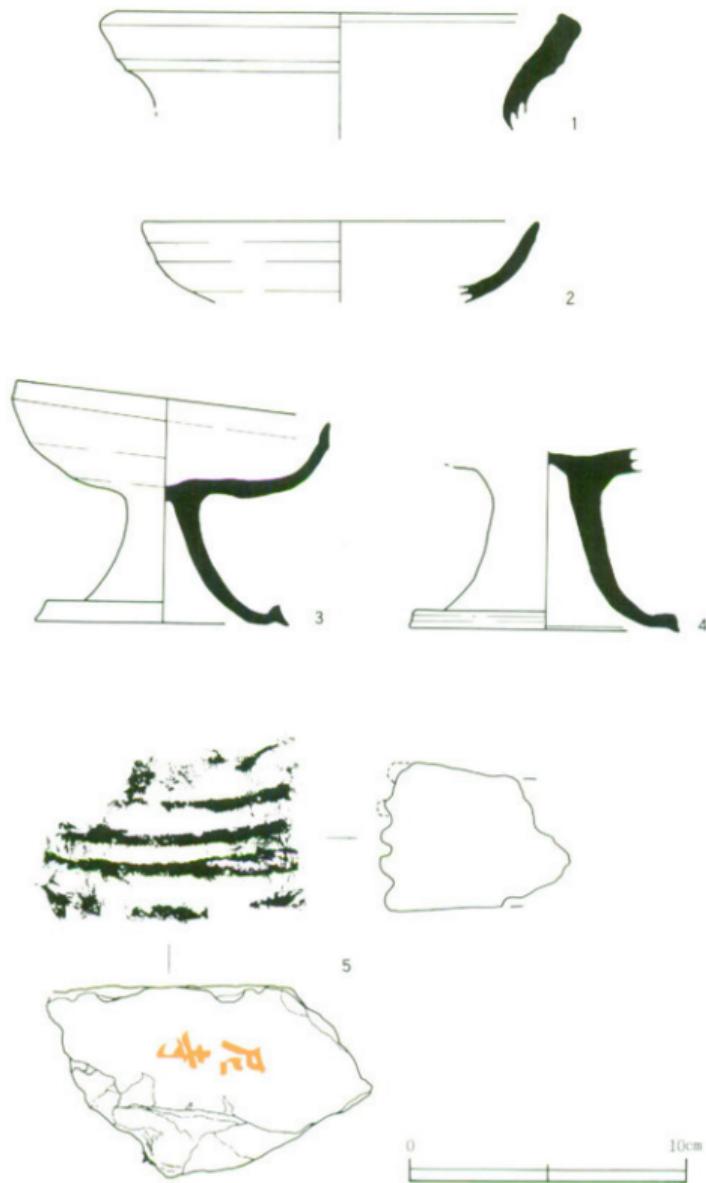
なお、F-III区の第2層中より、朱色で「尼寺」と書かれた重郭文軒平瓦が出土しており、国分尼寺跡の関連遺物と考えられる（第5図-5）。

## III かうげ地区の調査成果の概要

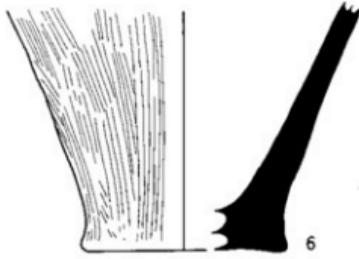
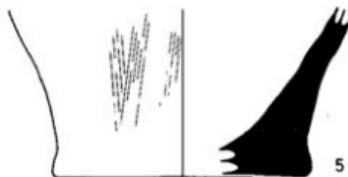
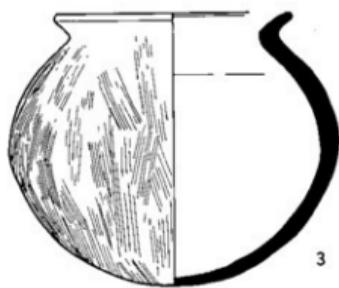
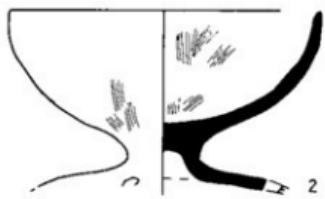
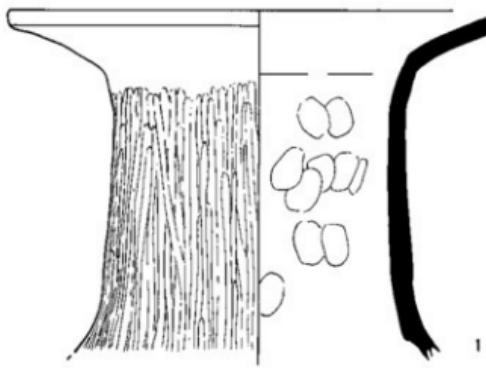
本調査地の地目は、本来水田であったところへ若干の盛土をして、現在は畠地となっている。標高は、水田跡面で約7.0mを測る。水田耕作土層以下の層序は、灰オリーブ色粘質土（水田土壤）約20cm、オリーブ色粘質土約15cm、以下黄色および灰色をベースとする粘質土となっている。全体的に土壤の粘性が強く、3層および6層にいたっては湧水が見られた。いずれの層も遺物は一点も含んでいなかった。また、遺構面の検出にも至らなかったため、本地区の調査は、結果的にはトレンチの断面による土層堆積状態の観察に終わった（第7図、第8図）。



第4图 神明地区出土土师器实测图



第5図 神明地区出土須恵器・軒平瓦実測図



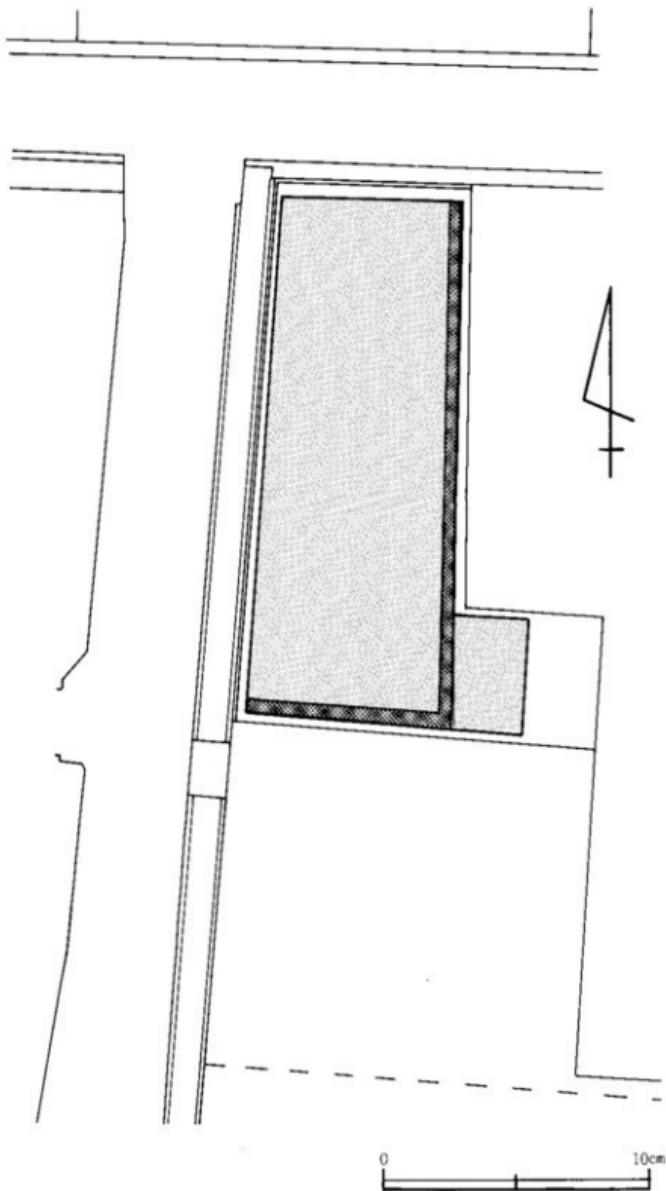
第6図 神明地区出土土器器・弥生土器実測図

## IV 小 結

今回の調査地のひとつである神明地区は、第6次調査地点から西へ極めて近い所に位置し、国庁に関する遺構・遺物の密な検出が予想されたが、調査の結果は予想外に終わり、第6次調査地点で検出された遺構の西への広がりは確認できなかった。しかも遺物包含層の下には遺構面となる安定した層が見られず、包含層直下は、調査区全域に旧河道と思われる砂礫層が広がるという状態であった。遺物に関しては、土器の小片が包含層一括的な出土状態を示したにすぎなかった。また、かうげ地区においても、地表面下1mでは水が多量に湧きはじめるといった状態で、遺物包含層および遺構面の検出には至らなかった。かうげ地区近辺でこれまでに行われた立会調査も含む大小の調査結果から言っても、本調査区以西で遺構・遺物が多量に検出される可能性は低いと考えられる。今後の調査では、ひとつには第6次調査地点の南北および東への遺構の広がりを確認することが必要であろう。

なお国庁跡と関連はしないが、弥生時代前期～古墳時代初頭に至る遺物が検出されたことは、矢野遺跡との関連も含めて、鮎喰川西岸における当該期の遺跡の在り方を検討していくうえで、ひとつの課題を提示したこととして成果であったと言える。

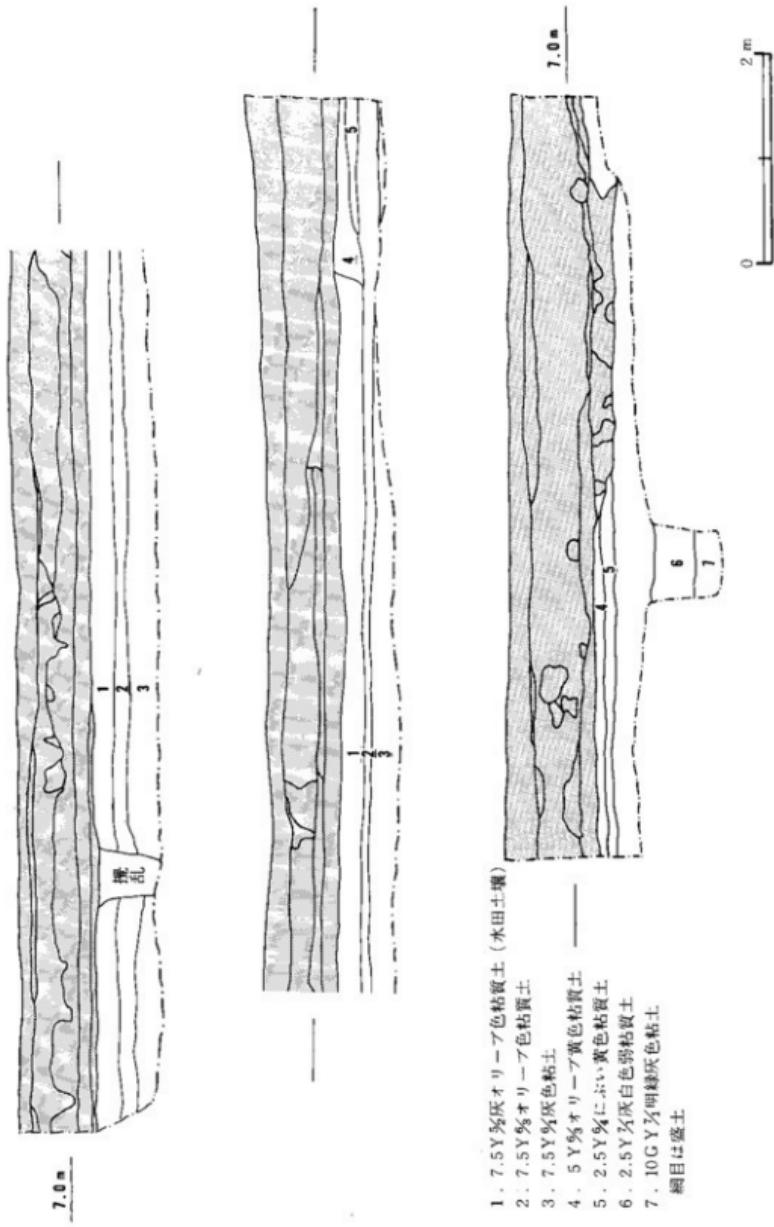
註(1) 『阿波國府跡第6次調査概報—1987年度—』 1988 徳島市教育委員会



第7図 かうげ地区発掘調査区

濃い緑目はトレンチ

第8図 かうげ地区トレンチ東壁(上・中)、南壁(下)土層図



1. 7.5Y%灰オリーブ色粘質土 (水田土壤)
  2. 7.5Y%オリーブ色粘質土
  3. 7.5Y%灰オリーブ色粘質土
  4. 5Y%オリーブ黄色粘質土
  5. 2.5Y%にじい黄色粘質土
  6. 2.5Y%灰白色弱粘質土
  7. 10 G Y % 黄褐色粘質土
- 縦目は盛土

# 図 版



神明地区遺構検出状況

(南東より)



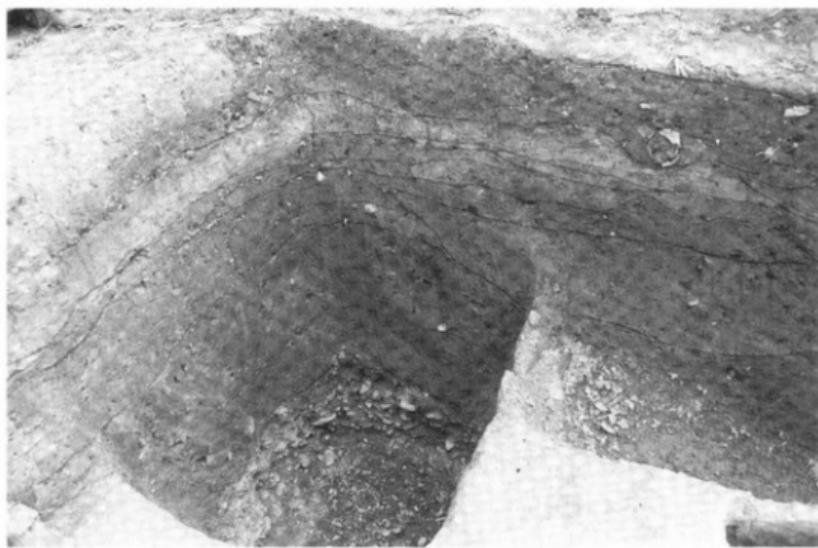
同上

(南西より)



神明地区遺構検出状況

(北西より)



神明地区土層堆積状況

(南東隅)



神明地区 D-1・II 区 第一造構面検出状況

(北より)



神明地区 D-1・II 区 第二造構面検出状況

(北より)

图版 4



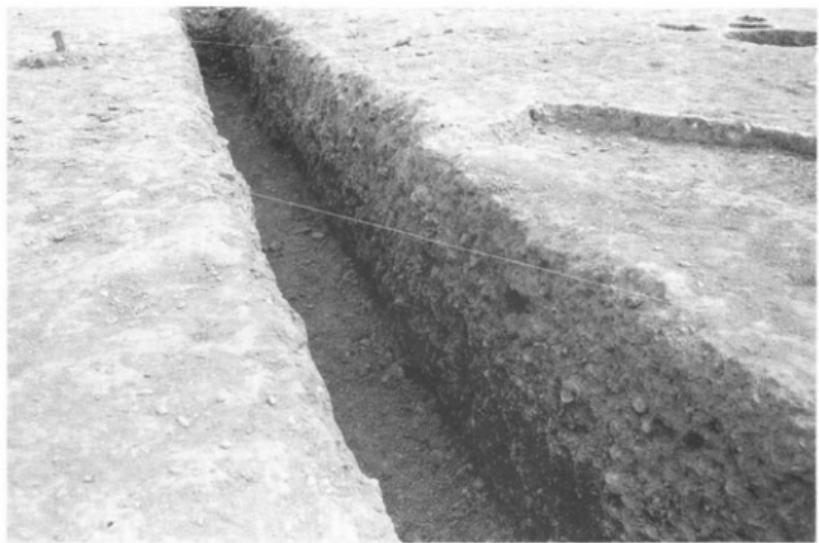
神明地区 土師器高坏出土状况



神明地区 須恵器高坏出土状况



神明地区 P-1007須恵器高坏出土状況

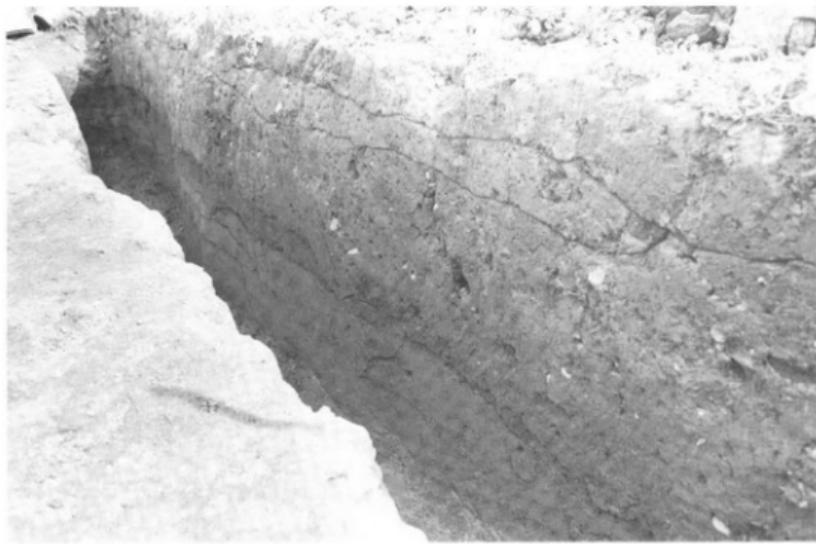


神明地区 サブトレンチ土層堆積状況

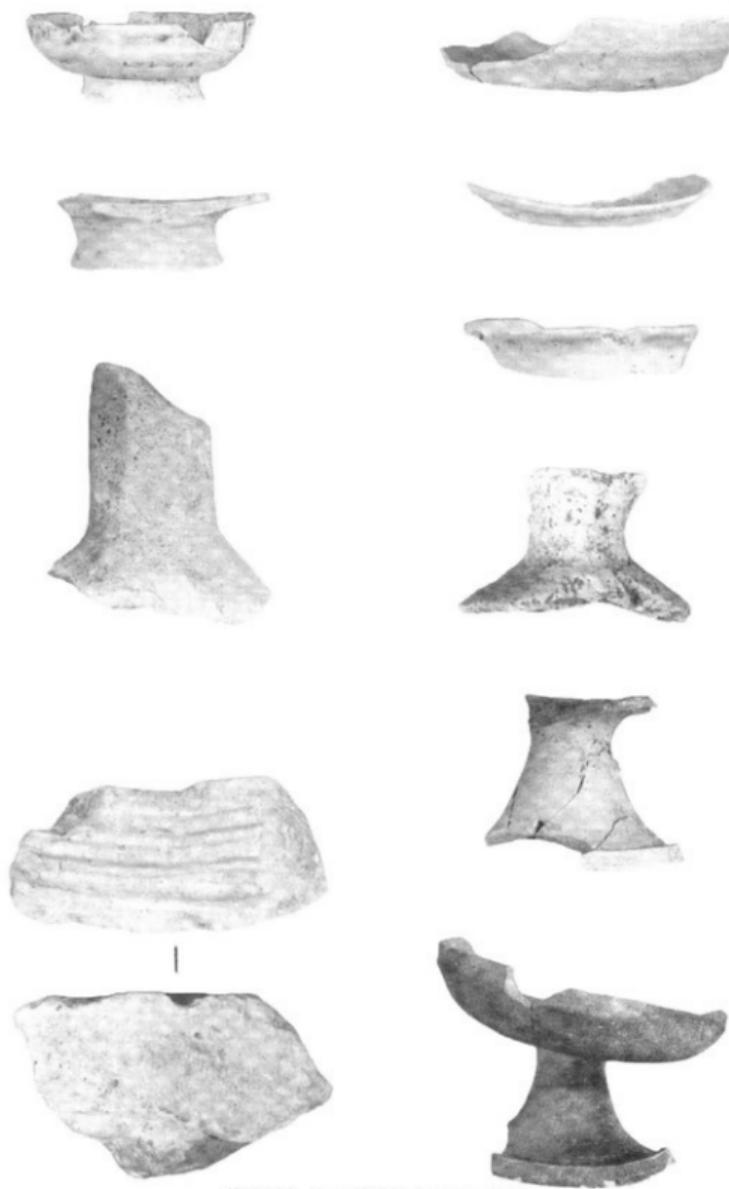


かうげ地区調査区近景

(南より)



かうげ地区 トレンチ南面土層堆積状況



神明地区 出土土師器、須恵器、軒平瓦



神明地区出土土師器・弥生土器

徳島市埋蔵文化財調査報告書第18集

阿波國府跡第7次調査概報

— 1988年度 —

平成元年3月31日

編集 徳島市教育委員会社会教育課

発行 徳島市教育委員会

印刷 グランド印刷